潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」
第Ⅵ期（2023 年 10 月～2024 年 9 月）成果報告書

研究課題（和文）： 津島佑子の文学における死者、動物、環境
研究課題（英文）：Dead, Animals, and the Environment in Tsushima Yuko's Literature
申請者名・所属先：村上克尚・総合文化研究科
海外招聘者名： なし

1. 研究の目的

本研究は、津島佑子（1947-2016 年）の文学作品を通時的に追っていき、死者・動物・環境という三つの主題の発展を探るものである。

2. 研究開始当初の背景

津島の文学について、現在の研究は二つの方向に分裂している。第一は、『寵児』などの初期作品をフェミニズム批評の観点から論じるものである。第二は、 2000 年代以降の巨視的なスケールを備えた長編小説を、世界文学や震災後文学の観点から論じるものである。いずれの方向も重要な成果をもたらしてはいるが、両者を架橋する視座はいまだ提示されていない。

3. 研究の方法

本研究は、津島文学を四期に分け、それぞれ代表的な作品を三つ選び、十二の作品論をもって、津島文学の全体像を素描することを目指す。その際には、津島のデビュー作「レクイエム」にすでに登場している、死者・動物・環境という三つの主題を導きとする。津島文学においては、親しい者の決定的な喪失が、謎めいたまなざしでこちらを見つめる動物や、不可視でありながら絶えず私たちを囲繞している環境への感度を高めていくという構造がある。一年間で、津島文学のすべての時期を検討することはできないが、その後の研究の基盤を築く作業を行ないたい。

4. 研究成果

3 月 19 日に、オープンセミナー「死者・動物・環境――津島佑子『寵児』のクィア・エコフェミニズム」を開催。私自身の同タイトルの発表に、木村朗子氏（津田塾大学教授）によるコメントと全体討議を行なった。これを通じて、1970 年代の女性文学を代表すると位置づけられてきた津島の『寵児』を、「クィア・エコフェミニズム」という新たな観点から読み直せることを示した。本発表は改稿のうえ、『日本近代文学』111 集に掲載されることが決定済みである。木村氏によるコメントも、「孕む身体と太古の時間――津島佑子初期作品『生き物の集まる家』『寵児』をめぐって」として論文になり、すでに『すばる』8 月号に掲載された。

7 月 25 日には、「津島佑子の文学――未来へ向けて」を開催。津島と親交が深かった、川村湊氏（法政大学名誉教授）、中沢けい氏（法政大学文学部教授）をお呼びし、ご講演をいただいた。作家本人をめぐるエピソードから、津島文学の本質に迫る話まで、多くの貴重な材料が提供された。こちらも、文字起こしのうえ、今年度中には発表の予定がある。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

〔雑誌論文〕

「死者・動物・環境――津島佑子『寵児』のクィア・エコフェミニズム」『日本近代文学』111 集、2024 年 11 月（掲載決定）

〔学会発表〕

〔その他〕